

R.S. さん

組織名: Archivo General de la Nación(メキシコ国立文書館)

目的: 古文書調査

現地調査期間: 2007年6月～2007年10月

調査の目的ときっかけ

現在、私は職場の「たばこと塩の博物館」(東京・渋谷)で、展示企画の実施と並行して、たばこが15世紀以降、そのふるさとの地である「新大陸」からヨーロッパへ、そして日本へと伝播していく歴史についての調査・研究も行っています。ここ数年、このテーマの研究には、関連地域の古文書館に保管されている原本を調べることが非常に重要であると考え、スペインやメキシコの文書館で2週間から1ヶ月程度の短期間の調査を数度行ってきました。しかし、当然この程度の短期間の調査ではほんの限られた史料にしか目を通すことができず、一度、じっくりと長期的に調査を行ってみたいと常々考えていました。そうしたところ、メキシコ政府外務省が、大学あるいは大学院などへの留学だけではなく、専門機関での調査・研究も対象にした「外国人向け奨学金給付プログラム(メキシコ政府奨学金留学生制度)」を実施していると伺いました。申請したところ、「特別プログラム」枠で奨学金を受けることができ、2007年6月から10月までの5ヶ月間、メキシコ市の国立文書館で調査を実施することになりました。

メキシコでの調査

私が調査・研究先機関として選んだメキシコ国立文書館には、メキシコ史を研究する上で重要な文書をはじめとした膨大な史料が保管されており、メキシコ国内だけではなく、アメリカや日本からも多くの研究者たちが調査・研究に訪れています。しかし、そうした研究者のほとんどは、他の研究機関に籍を置いて必要な時だけ文書館で調査をするのが普通であり、今回の私のように政府からの奨学金を受けた者が文書館そのものを受入機関として指定することはなかったようで、当初は、受入担当者も困惑していました。そして、奨学金を受けている以上、調査・研究計画を立てるのはもちろん、調査経過報告書と最終報告書をきちんと作成して提出することを、かなり厳しい態度で求められました。確かに私の場合、論文提出あるいは試験合格といった明確なゴールの設定が難しかった上、完全に個人での調査であり、文書館へ行った日が記録される訳でもなかったので、いくらでも手を抜くことが可能だったからです。しかし、念願の調査がようやく叶ったわけでもあり、また日本人はいい加減だとも思われたくありませんでしたので、5ヶ月間、時には怠けたくなる心と戦いながら文書館へ通い続けました。そのおかげで、とても貴重な情報を得ることができました。また、個人調査であったため、親しい仲間・友人が作れるという状況にはありませんでしたが、毎日通っているうちに文書館の大勢のスタッフと顔見知りになって雑談をするようになり、親切にアドバイスや対応をしていただきました。

メキシコでの生活

メキシコでは自炊生活を送りました。メキシコ市は標高 2,000 メートルを越える高地に位置するため、夜にあまり重い食事を摂ると消化に悪いと聞いていたので、昼食を 1 日のメインの食事とし、午後 3 時半ごろまで文書館で過ごした後、昼食を食べて帰宅するという日々を送っていました。ちなみに、メキシコでは昼食は午後 2 時半ごろから 4 時半ごろにかけてゆっくりと摂るのが通常で、多くのレストランでは 400 ~ 700 円ぐらいでボリューム満点の美味しい日替わり定食を食べることができるので、さまざまな料理を楽しむことができました。また、メキシコ市にはスーパーやコンビニの数も多く、普通に生活するにはほとんど不自由は感じませんでした。ただ、治安に関してはやはり最低限の警戒は常に心がけておいた方がよいと感じました。私は、一度改札を入ると別の改札を出るまで 2 ペソ(約 20 円)でどこまでも行ける地下鉄(メトロ)で文書館へ通っていましたが、この地下鉄に乗る時や人混みの中を歩く時などはもちろん、外出時はかなり気を張っていたように思います。そのおかげもあってか、滞在中は何らトラブルに見舞われることなく過ごすことができました。

メキシコの人たちは非常に親切で親日家ですが、単なる旅行ではなく、全く異なる文化を持った人たちの中で短期間でも生活すると、当然ストレスも溜まってくるし不愉快な思いをすることもあります。それでも、無事に帰国してみると、そういう思いをしたこと自体も良い経験であったと思われま。す。今後は、今回の調査で得ることのできた情報を、何らかの形で報告していくとともに、継続して古文書の調査を続けていければと考えています。最後に、こうした貴重な機会を与えていただいたメキシコ合衆国政府外務省および在日メキシコ大使館、メキシコ国立文書館をはじめ関係各位に対し、改めて感謝の意を表します。